

旅順・大連、引揚げ

千葉県 富山五郎

私は旅順で生まれ、終戦後に大連に移動させられるまで、旅順で育ちました。

昭和五（一九三〇）年三月二十五日、日本画家の父休三の四男として関東州旅順市朝日町で生まれ、兄三人と姉三人の七人兄妹の末っ子でした。朝日町で生まれたものの、物心がつくころは、市のやや北東に当たる支那町と総称される一帯の中の、柳町に移っていました。その支那町一帯は、その名のように当然満人の住民が多くを占め、道端に露天を並べてねじった揚げパンとか何かを蒸したものとかが、南京豆などを売っていました。満州国のたばこを売る店もあり、まだ満州国の通貨「トンズル」も通用していました。日本の五十銭玉ほどの大きさの銅貨「トンズル」三枚と、日本の一銭銅貨と兌換だかんされていましたので、子供心に

もなぜ大きい方の「トンズル」が小さい一銭より安いのか、不思議に思ったものでした。不意の来客時などに、その「トンズル」一枚と葉缶を持って、お湯を買いにやらされたことも何度かあったことを記憶しています。立釜で「ビー」と笛を鳴らしながら、一日中お湯を沸かして売っている満人の店が近くにあったのです。

昭和十一年小学校に入学、一年坊主となった四月中旬、長兄の勤務先の民政署にも学校にも近い高千穂町に引っ越しましたが、そこは民政署と警察署の官舎でした。近所に警察官の一家が住んでいた、私より幼い兄弟が仲良く遊びに来ていたものでしたが、そのうちに一家が奥地へ転勤となりました。その任地から、旅順にいたときのお礼やら、近況報告を兼ねた奥様からの便りがありました。その便りには、夜になると遠くから銃声が聞こえてくると書いてあり、母が「まだ奥地では匪賊が出るんだね」と、独り言を言っていたことがあります。澤地久江さんの著書「もう一つの満

州」によれば、そのころは楊靖宇という抗日ゲリラが活躍していたらしことを知りました。

昭和十二年七月支那事変が始まり、夜になると照空灯が夜空を探り、また白玉山頂には聴音機と高射砲が据えられ、北支からの空襲に備えていましたが、やがて北支の支那空軍の飛行場も日本軍に制圧されたらしく、見られなくなりました。

南京陥落時には祝賀行事として、昼は旗行列、夜は提灯行列が行われ、私たち小学生も昼間の旗行列に参加し、「天に代わりて不義を討つ忠勇無双の我が兵は……」と歌いながら、旗を振り振り行進したものでした。その行進に、満人の小学校「公学堂」の生徒や満人の大人たちも参加していましたが、あるいは参加させられていたと言った方が正しいかもしれませんが、彼らはどんな気持ちで参加していたのだろうか？ 祖国と戦っている日本の戦勝祝賀なのに。満州族の清を滅ぼした漢民族の支那は、祖国と思っていなかったのかもありません。また小学校も、戦地へ向かう部隊の

仮兵舎として使われ、近くの空き地などで訓練をしていましたが、我が家の近くだったので、休憩時には家から冷たい氷水を運んで喜ばれていたものでした。

訓練終了後に、空葉莢を真剣に探している姿を見たものでした。空葉莢を真剣に探すようでは、戦地で実戦のときはどうするのだろうか、子供心にも不安な思いをしたものです。後に、ある級友が「あの部隊は、南京攻撃でほとんど戦死した」と話してくれました。

昭和十六年、小学校は国民学校と改まり、六年生の十二月八日、大東亜戦争が始まり、赫々たる戦果の報に喜び勇んだものでした。そのころには、我が家は末広町へ引っ越していました。長兄が民間の会社へ転職したので、官舎を出たためです。その家は、南隣が日本人住宅であったほかは、小学校近くまで満人の商店が両側に並ぶ通りに面していました。

私は、昭和十七年四月から旅順中学校の一年生

となり、楽しい夏休みが始まるはずでしたが、夏休み返上で関東軍倉庫へ勤勞奉仕に駆り出されました。上級生は、一年生とは別の所で作業をしていたようで、一緒にはいませんでした。

私たちの作業は銃の手入れでした。その銃は「三八式歩兵銃」ではなく、脚の付いた「九七式狙撃銃」とかで、日本人の体格に合わせて改良された、ちよつと短めの「九九式歩兵銃」でした。木箱から出された銃は薄く錆付いていて、その錆を磨き落とし検査を受け、合格した銃にはグリースを塗り、再び木箱に格納するというのが私たち一年生の作業でした。それらの作業は屋外で行われていましたが、倉庫内には長さ一メートルぐらいもある大砲の弾丸が床に整然と並べられていて、さすが関東軍と心強く思つて帰宅したものでした。しかし、翌年の夏休みに再び作業に行ったときには倉庫内には何もなく、「ここで見えたことは、たとえ家族にも口外してはならぬ」と、固く口止めされて帰宅したものでした。

昭和十七年の五月から、私たちの家に水兵が下宿するようになりました。海軍では士官用に水交社が、下士官以下の者たちに「下士官・兵集会所」などの施設があり、上陸した際に休憩や宿泊ができるようになっていましたが、すべてベッド生活なので畳に座り、畳に布団を敷いて寝たい、さらに家庭用の風呂にも入つて故郷の味を味わいたい、と希望する者が特に許されて、民家での下宿が許されていたとのことでした。

当時、旅順港には第二十四水雷戦隊の水雷艇「鳩」「雉」が常駐し、黄海などの警備に当たっていたとのことでしたが、私の家にはその中の「雉」の兵曹と水兵が下宿しました。その中の某水兵が「秘密だよ！」と念を押して、「もう、日本には航空母艦が無くなった。加賀も赤城もミッドウェーで沈んでしまった」と、そつと教えてくれました。それを聞いた私は、驚きと共に航空母艦が無くなってこの先の戦争はどうなるんだろうと、心細い思いをしたものでした。

翌昭和十八年には、兵曹たちの乗艦は駆逐艦「刈萱」に替わりました。夜半過ぎに、緊急出港だとたたき起こされ帰艦することが再々ありましたが、当然目覚めていた私は一体何ごとだろうと、いぶかしんだものです。このようなことは、何度もありました。「これも秘密です」と呼び起こしに来た兵が、後に教えてくれた話では、日本の艦が沈められ、その乗組員の救助のためと聞かされたことがあります。私と顔見知りのある水兵が、泳ぎながら「木をくれ！」と言いながらそのまま沈んで行った、ということをかされた私は、胸が詰まりました。しかし、私は秘密を守るという意識はありませんでしたが、だれにも話しませんでした。しかし、満人たちはこのことはよく知っていました。

中学二年生の二学期からは、郊外土城子で海軍飛行場の建設が始まり、我々中学生も二週間交代で勤労奉仕に駆り出されました。その飛行場は、どちらからの風でも離着陸できるように、滑走路

が一辺千メートルの正三角形に設計されていましたが、完成後最初に着陸したのがソ連の飛行機だったと聞き、苦笑いをしました。

その土城子では、忘れられない出来事があります。同じように駆り出されて来ていた、高等公学堂（満人の中等学校）の生徒が夜八時過ぎ、大挙して我々日本人中学生の宿舎を襲撃してきたことです。その理由は、夕刻日本人の中学生の一人が、満人学生と共同で使用している便所で、彼らの一人を殴ったことへの復讐でした。日本軍人の制止で治まったものの、根にはもっと深いものがあったと思います。ミッドウェー海戦の結果を見て、日本は負けると彼らは思っていたらしいのです。表面は従順を装っていましたが、心の中では反日感情でいっぱいだったのでしよう。日本人には、満鮮人蔑視の風潮があったことも見逃せません。その上彼らの多くは、北支から秘かに潜入していた国民党員に誘われ、国民党に入党していたようです。彼らは内戦終了後処罰されました。中学校

の同級生に、満人の張世泰君がいました。大連から経済視察団の一員として来日した彼のために、接待クラス会を催した際、「僕は日本人の中学校に入学して良かったよ。もし公学堂に入っていたら、国民党に誘われ入党しただろうし、そしたら今の僕はいないよ」と、しみじみ語っていました。さらに三年生の秋からは、大連甘井子にある工場への勤労働員となり、学校には一、二年生だけが残って授業を続けていました。

翌二十年二月、胸に陰があり「三カ月の静養を要す」との診断を受け、動員免除となり、学校での自習を命じられました。この年から、中学の修学年限が四年と改まり、上級生の二学年生が一度に卒業していききました。四年生となった私たちは、学校で自習を続けていましたが、やがて先生が櫛の歯が抜けるように、一人二人といなくなりました。極秘裏に召集されて行ったのです。我々残留四年生に、残っていた先生方からせめて午後だけでも学科以外に、一、二年生の教練などを手伝え

と請われて、その手伝いをしていました。五月となり気候も良くなってきたせいか、体調も戻ってきたようなので、動員先に戻ろうかと考えましたが、甘井子には戻りたくないという思いもあって、考えていた矢先、海軍工作部から来てくれないかとの誘いを受け、自宅からの通勤可能という利点もあって、同級生四人一緒に工作部へ行くことになりました。

工作部での仕事は、大連にある満人経営の鋳物工場で製造され沖繩へ送られる手榴弾本体の検査でした。検査を甘くしてもらおうという下心からか、昼食時に煎餅チンビンを出してくれ、飢えていた我々は有り難く頂戴しました。合格品をトラックに積み旅順へ帰り着くころには、薄暗くなっていました。この作業は、沖繩の戦いが終わった後も続きました。

その年の八月六日朝、次兄の結婚式場の控え室は慌ただしい空気に包まれていました。次兄に召集令状がきて、午後二時に入隊せよとのことだっ

たのです。そのため、急いで式を済ませ午後出征して行った次兄が、三、四日後ヒョッコリ旅順に帰って来ました。わけを聞くと、入隊したものの武器らしいものは何も無く、実家に武器のある者は取りに帰れとの命令が出たということでした。

我が家には古いサーベルしかありませんでしたが、それでも無いよりはましだろうと持って行きました。武器もない軍隊が、どのように戦うのだろうと呆れました。そのころには、学校にあった教練用の古い「三八式歩兵銃」もとつくに無くなっていました。軍が徴集して行ったと言うのですが、あんなのが使い物になるのかと不思議に思いました。

八月十五日平常通り出勤したところ、いつも岸壁に繋留停泊している艦が出港したらしく、見えませんでした。その艦は四百トン前後の小さな艦ですが、乗組員は優秀な兵が揃っていたと見え、停泊中は艦橋の上に据えられた高射機関銃の操作訓練を絶え間なく行っていて、艦橋全面には撃墜

したらしいグラマン二機と、B 24 一機の墜落する様子が描かれていました。今日は、なぜか大連へ引き取りに行かず構内にいました。正午に重大放送があるとのことで、主だった方々は事務所内で聞いていたらしいのですが、しばらくすると女子事務員たちが目を押さえ、泣きながら出て来ました。何ごとがあつたのかと尋ねると、放送はよく聞こえなかつたけれど、日本は負けたらしいと話してくれました。それを聞いた私は、そんな馬鹿などと思う一方、やはり駄目だったのかと思ひ、何かホッとした気持ちもありました。「これで死なずとも良い」と思つたのです。八月九日ソ連軍が突如侵入して来たとの知らせに、留年した年上の同学年生や我々より相当年輩の在郷軍人たちが集まり、郷土防衛隊が組織され、小学校に宿泊し訓練を始めました。それを見た私は、もしソ連軍が旅順まで攻め込んで来たら、私も共に戦つてここで死ぬのだと覚悟を決めていたからです。

午後二時を過ぎたころ、前述の艦が帰港して来

ました。艦橋に、潜水艦の絵を逆さまに描いていました。上陸して来た水兵に「潜水艦をやったの？」と尋ねると、「そうだ。爆雷が命中して、水注が表忠塔（白玉山頂に建つ高さ六十五メートル）より高く上がったぞ」と自慢し、「ところで重大放送の内容は何だったのか、艦の中ではよく分からなかった」と聞くので、「どうも日本は負けてしまったらしいよ」と答えると、何も言わずに艦に帰って行きました。この日も、夏空はいつものように太陽が我々を照らしていました。暑い日でした。思えば、この米潜水艦は不運であったと思います。あと一日でも潜んでいれば、無事アメリカに帰還できたものを。

しかし、その後も我々の構内作業は続いていました。その作業とは、例の満人工場から持ち帰った手榴弾に、火薬を詰める作業でした。ドラム缶よりひと回り大きい三百リットルくらいもある爆雷の蓋を取ったものを側に置き、中から火薬を掬い出し、それを詰め込む作業ですが、手榴弾の中

には燃焼時間四秒に切り揃えた導火線に、雷管を接続した起爆装置を予め装着しながらでした。火の気の無い所での作業とはいえ、危険な作業をやらされていたものですが、我々は平気でそれをやっていました。

八月二十二日、ソ連軍は旅順へ進駐して来たようでしたが、翌二十三日朝、いつものように出勤して行くと、工場入り口の門の両側にマンドリンを持ったソ連兵が立っており、向こうへ行くと追いついて、い払う仕事をされたので、帰宅しました。やがて、海軍軍人たちは新市街の工科大学へ収容され、無人となった官舎の空き家に残されたのであろう物を、肩に担ぐやら車に積んで略奪して帰る満人の列が、ぞろぞろと我が家の前の道路を通って行きました。貧しかった彼らには、貴重品だったと思います。私も、あの辺りがどんな具合になっているのか見てやろうと歩いて行くと、海軍施設部の扉が開けっ放しになっていました。海軍施設部とは、例の土城子飛行場の建設に当たっていた部署

です。中に入ってみると、めぼしいものは何もな
くガランとしていましたが、ふと隅に目をやると
ダイナマイトと導火線が転がっていました。私は、
ダイナマイトと雷管一個ずつと導火線を少し持ち
帰り、白髪染めの空き缶で手榴弾を作りました。

満人が暴動を起こすとのうわさがあり、もし彼ら
が我が家に押し寄せて来たなら、投げつけてやろう
と考えたのです。今思えば、全く無謀なことを考
えていたものです。旅順の満人は友好的でした。

ある日の夕刻、薄暗くなったところに人が訪ねて
来ました。よく見ると、彼は我が家に下宿して長
山列島の監視所に勤務していた、元水兵でした。

彼は今、工科大学に収容されていたのですが、そ
つと抜け出して来たのだと言います。そして「大
八車を借りて来い」と言うので、向かいの満人か
ら借りて来ましたら、「一緒に来い」と言われ姉
と二人で付いて行くと、そこは近くにある聖徳殿
でした。その中に入ったのは、積み上げられて二、
三百俵はあるかと思われる米俵でした。戦争中、

海軍がいち早く隠匿したもので、彼もその作業に
携わったらしいのです。「どうせソ連軍に取られ
てしまうのだから、必要なだけ持って帰れ」と彼
は言いましたが、何か悪いことをするような気が
してためらっていますと、「早くしないと見つか
る」とせかさされ、十俵ほど持って帰りました。元
水兵が心配したとおり、やはりだれかが見ていた
のでしょう。その夜のうちに米俵は無くなってい
ました。

そのころから、どこそこの満人の女房がソ連兵
に強姦され今日も泣いているとか、入院中の女性
患者が強姦されたとのうわさが流れ、日本人女性
は髪を切り丸坊主になり、男性の服を着用して男
装したものでした。最初に入って来たソ連兵は囚
人部隊で、戦線から直接来たのだとうわさされて
いました。全くの無学文盲で、字も読めずろくに
計算もできないようでしたが、物欲だけは強く「ダ
ワイダワイ」と何でも欲しがりました。中でも腕
時計と万年筆への執着心が強く、一人で何個も腕

に巻き付けている者がいましたが、ネジの巻き加減も分からず、強く巻き過ぎて捻じ切ってしまう者もいたと聞きました。日本人男性のほとんどは、腕時計を巻き上げられたと思います。

しばらくして、ズボンの横に赤い筋の入った将校の巡察が始まり、治安も回復してきました。

やがて、日本人が通りにごぎを敷きにわか造りの露店を出し、着物などを並べて売りに出したところ、ソ連軍の中には女性もいて、その女性たちが日本の着物を知っていたらしく、「オー、キモノ」と喜んで裾模様の訪問着を買って行き、ドレスに仕立てて着用する人もいました。また、ソ連軍の中に軍服を着た子供が兵士に手を引かれ、兵士と共に行進している者も見えました。あれは女性兵士と男性兵士との間にできた子で、政府の責任で軍が育てているのだとうわさしていたものですが、そんな子供を何人も見ました。

そんなある日、召集されていた次兄が義姉を連れて、旅順の我が家を訪れて来ました。聞けば玉

音放送後、即日現地除隊、現地解散となり、十八日には大連に戻り元の職場に復帰しているらしく、よほど決断力のある部隊長だと感心したものでした。

その義姉が入浴中、突然若いソ連兵がやって来て、それを追い返すのに何やかや話し掛け、前に立ち塞がり兄が苦勞したのも、今では思い出の一つです。それと前後して、長兄も会社のトラクタで様子を見に来ましたが、食糧もあるのを見て安心して帰って行きました。このとき、家財類をできるだけ持ち帰ってもらえば良かったと思うのは、後日のことです。

同級生の笠原君は、父上が医専の校長兼同附属病院長をしていました。彼の家では、若いソ連兵が二人、マンドリンを持ち門番をしていました。ソ連軍は医者的大事に扱ったのです。彼の家へ行くと言葉は通じないものの、身振り手振りで彼ら二人といろいろ話していました。彼らはモンゴル人で、ベルリン陥落後旅順へ来たと言い、着てい

るシューバーも履いている長靴も帯びている拳銃も、これもゲルマン、これもゲルマンと得意になっていました。年齢を尋ねると十八だと言ひ、私にお前は何歳だと聞くので十六歳だと言ったら、「オー、マーレンキ（小さい）」と言つて笑つていました。笠原君の父は、その後もずっと日本に帰してもらえず、大連で亡くなつたということです。

やがて十月になると、すべての日本人は大連へ移動と決まり、大連に親戚のある者から先に移動せよとの命令が出ました。荷物は両手に持てるだけとのことでした。馬車を雇つて行こうという話も出ましたが、途中で略奪に遭う恐れもあり、汽車で移動することにしました。家財道具類は、向かいの満人に買い取ってもらいました。

そして、十月十日大連行きの列車に乗り、しばらく走ると、多数の元日本兵が線路工事に使役されて見えました。乗客の中に、兵隊さんを気の毒に思つたのでしよう、列車の窓からたば

こをあげる人もいました。予め母が連絡していましたが、長兄が大連駅に迎えに来ていて、聖徳街四丁目の長兄の社宅に落ち着きました。その社宅は、二階建ての四世帯の建物が二棟ずつ向かい合つて建ち、その間にコンクリート舗装の通路がありました。その両端は道路に通じていましたが、高い板塀と潜り戸がありました。満人の暴動と、ソ連兵の闖入を防ぐためと聞きました。

十月ごろになると、今までどこにあったのかと思うほど、米や砂糖を始めいろいろものを売る露店が通りに並びました。その年末は、有志で金を出し合い餅米を買い、餅つきをしました。一階の奥さんが三味線のお師匠さんでしたので、鳴り物入りの賑やかな餅つきでした。

そのころは奥地からの避難民が大勢いたと思いますが、市の西部にあったその町の近くには、避難民を收容した学校もなく、彼らのことをそれほど肌で感じていなかったようです。收容所となつた学校は、市の中央部からやや東寄りにあつたせ

いもあるし、春ごろには日本に引き揚げられるであろうと多寡をくくっていた節もありました。日本人の草野球クラブもいくつかできて、クラブ同士のトーナメント戦も行われ、そのころまで日本人は楽しい生活を送っていました。

旅順から移動した小中学生は地域ごとに学校を決められ、私は大連中学に転校しましたが、校舎はソ連軍に接収されていましたので、小学校を借りての授業でしたが、ほどなく接収解除された校舎の掃除を四年生が命じられ、校舎の階段下にある倉庫のドアを開けると、マンドリンの弾がバラバラと転がっていました。二、三十発はあったでしょう。それを拾い集め先生に届けましたが、かつての日本軍では考えられないことで、負けるのも仕方がないと思いました。

学校にはろくすっぽ出席しませんでした。翌年三月には卒業証書もらうことができました。

三月には、私もロープ造りの仕事に出ました。仕事場は大広場小学校の校庭でしたが、その作業中

に見た光景は、今でも脳裏に焼き付いています。それは、校庭の隅を掘り返し死体を大八車に乗せ、どこかへ運んで行くようでしたが、乗せられた死体は痩せこけ、二本の足ばかり長く見え、土のみれた屍はさながら泥付きの牛蒡のように見えました。

大広場小学校は収容施設の一つでした。飢えと寒さと不潔から虱が発生し、それによる発疹チフスの流行で次々と倒れました。その難民を救援するため、有志により日本人会が結成されようとなりましたが、反動的な組織だと許可にならず、かつての共産黨員及びそのシンパ連により日本人労働組合が発足しましたが、中には敗戦によるにわかシンパもいたと思います。軍国主義を唱えていた者が、敗戦後急に民主主義者になったように。難民の救済と日本人引揚げの折衝に当たりましたが、その資金を集めるために日本人の金持ち（彼らによれば反動分子）に要求しましたが、オイソレとは出しませんでした。そこで、悪評高い人民裁判

が始まりました。罰金十万円と判決を言い渡して、金を集めたようです。その横暴ともいうやり方が、日本人の怨嗟^{えんさ}的になりました。

組合幹部の中には、立場を利用して裕福な暮らしをしたり、一般より早く帰国した者もいたようです。そのようなうわさを聞き、益々労働組合への憎しみが増していききました。

その春ごろからブローカーが現れ始め、砂糖とかサッカリンの売買話を持ちかけましたが、多くは架空話だったようです。

ある日、電車停留所脇の交番跡と思われる小屋の中に、一人の日本人男性の死体が転がっていました。恐る恐る覗いてみますと、五十歳くらいの男が背中にリュックサックを背負って倒れており、額を割られたのか血が固まっていました。その男性は、何かの儲け話で現金を十何万か持ち、満人ブローカーと出掛けたまま戻らず、心配されていたそうです。しかし、その遺体はなぜか放置

されたままでした。ロープ造りの作業を終わって帰宅の際、まだ片付けられていないと思いつながら帰宅しました。

昭和二十一年十一月、聖徳街及びその一帯の日本人は、政府の指定する町の日本人宅に同居するようにと命令がでました。中国人（このころは「満人」とか「支那人」と呼ぶのは禁じられました）労働者の住居にするためでした。彼らも貧しかったのです。布団、衣服、鍋釜のほかは、置いて行くように言われました。照明器具はもちろん台所の棚、ガスコンロもでした。我が家が割り当てられたのは、大連運動場の山寄りにある桔梗町の三階建てで、総戸数十五戸の小さなアパートの三階の隅にある一室でした。その家は五十過ぎのご主人と奥さんの二人暮らしだったので、我々一家と同居させられることになったらしいのです。部屋数は三部屋で、そのひと部屋をご夫婦が、残りの二部屋を我々六人が使うことになりましたが、不便なことに三階まで水道水があがってきませんで

した。大連にあった工場の機械類と一緒に、浄水場のポンプまでソ連が本国へ持って行ったので、水圧が足りないのです。仕方なく、兄と私で一階からバケツで運びました。真冬には、バケツからこぼれた水が瞬時に凍り付くほど、厳しい寒さでした。

大連運動場にはたくさんの露店が並び、主に食料品を売る店が多かったのですが、中には食料品を買うために換金しようとする日本人が、布団や衣類を並べて売っている店もありました。この露店の一角に、二坪ほどのバラック建ての飲み屋が三軒ほど並んで建っていました。

ある日の夕方、その一軒からチャイナドレスに身を包んだ若い日本人女性が、四十過ぎと思われる裕福そうな中国人男性と腕を組み、店を出て来ました。男は、女性の腰に手を回しながら耳元で何か囁くという格好で、夕闇に消えて行きました。生活に困った日本人女性が、中国人に体売っているといううわさは耳にしましたが……。し

かも、その女性は私の幼友たちでしたから、思い出したくない一齣です。このことは、だれにも話したことはありません。

一方、我が家でも生活はだんだん苦しくなってきました。何しろ職は無く、従って収入はありません。必然、売り食いとなるわけですが、売るのが乏しくなってくると共に、食べ物の量も質も低下していきました。米に高粱を混ぜたのは春ごろ、夏には高粱だけ、秋には包米粉のお粥、引揚げ直前には豆粕からふすままでを食べるようになりました。それも、今の甘食パン大の蒸しパンを朝夕一個ずつでした。最初はとても喉を通らず、支那大根の細切りを具にした薄い醤油汁をかけて、流し込むように食べていましたが、馴れてくると汁無しでも食べられるようになりました。今思うと、これらの食物は白米よりビタミンが多く含まれ、お陰さまで栄養失調にならなかつたと思います。ひたすら、引揚げ開始の日を待つばかりの日でした。一年前とは大違いでした。

大連からの引揚げが始まったのは、昭和二十一年十月ごろだったと記憶しています。最初は奥地からの難民、次に生活困窮度の高い家庭からという順に行われたはずでしたが、なぜか聖徳街隣組長が最初の引揚船での引揚げとなり、一緒に聖徳街に住んでいた我々は、何であの家族がといぶかりました。労働組合に賄賂を使ったのだろうと、陰口をたたきました。何しろ組長の家は庭付きの大きな家に住んでいて、とても困窮者とは思えなかったからです。怒ったある人が組合に問い正しましたら、「賄賂ではない。労働組合への寄付だ」との回答でした。なお労働組合から、「組長はソ同盟への忠誠を、帰国後もソ同盟のために尽くすことを誓わされ、誓いを破ったら裏切り者として家族共々生命の保証は無いと言われた」と言いながら、涙をこぼしていたと聞きました。

私たちが引越した桔梗町のアパートでも、一階にいた隣部屋のご夫婦が年末に、また年が明けると二階の班長一家が引き揚げて行きました。二

階までは水が出るので、班長さん（当時は町名が〇〇街〇段〇班と変わっていました）の奥さんに頼んで、玄関の鍵は開けたままにして頂き、風呂を利用して頂くことにしました。石鹸は無いので、部屋にあった髪洗い粉で頭と体を洗いました。幸いと言いますか、我が家の者はだれも虱を持っていませんでしたが、何カ月ぶりかの入浴はとても気持ち良いものでした。部屋にはストーブも残っていましたので、湯冷めで風邪をひくといけなイと思つて、押入にあった古雑誌などを燃やして暖を取ったことも覚えています。

班長の引揚げが決まった後、次の引揚船の乗船者をどの家庭にするかを決めるため、班長さんの奥さんが我が家の布団、衣類の保有数を調査に來られ、あまりに少ないのに「何で早く相談に來てくれなかったの」と、驚きと共に眩くように「これじゃ、次の船にしなきゃ」と言いながら歸られました。引揚げまでに何度も移住して、そのたびに家財を処分した家庭と戦時中から定住していた

家庭とでは、ものの保有数は比較になりませんでした。その上、建物の構造上一戸建てと違って、他家のことはあまり分からなかったのです。

とにかく次の引揚船での引揚げが決まり、大連埠頭の収容所に入ったのは、昭和二十二年二月二十日だったと記憶しています。その日の夕食は、玄米と鯨の薫製の炊き込み飯でした。アルミの食器に入れて出されたこの飯ほど、おいしいと思う食べ物にその後一度も遭ったことはありません。それほどうまいと思いません。何せ、その日の朝までふすまパンを食べていたのですから。翌日の夕食後だったと思いますが、隣に座っていた五十歳過ぎと思われる小父さんが、ズボンの裾を捲り上げ「見て下さい。傷の周りの肉がこんなに盛り上がってきましたよ。やはり食べ物が良いと違うんですね」とつくづく眺め、感心した様子で傷の周りをさすっていたのを思い出します。この小父さんも、昨日まで何を食べてきたのだろうか、同病相哀れむ思いを抱いたものでした。

この収容所で、小学校一年生からの級友森井敏夫君と出会いました。彼のお父さんは要塞司令部の陸軍大尉で、当然捕虜になっていたと思います。彼にはお姉さんと妹がいましたから、当然その家族と一緒にいるはずなのに、なぜか四十歳くらいの男性と一緒にでしたが、人目を避けるように建物の影に座っていました。話し掛けられるのを避けるような素振りでしたので、「やあ」とだけ言って離れましたが、その後彼の消息を聞いてはいません。或いは、同行の男性は脱走兵だったのかもしれません。収容所の中には、まだ密告者がいましたから。小学校の同窓会名簿に妹さんの住所が載っていましたので、妹さんの同級生にお願いして彼の消息を尋ねましたが、居所はもちろん生死さえも分からないとのことでした。

やがて引揚げ団の団長も決まり、何家族かずつを班にまとめ、長兄はその一つの班長を任せられました。

二月二十二日の夕食後、いよいよ乗船が始まり

ました。ソ連の検問所を通り、全員の乗船が終わって船が岸壁を離れたのは、夜十時を過ぎていたと思います。船が大連港を離れ黄海へ出たころ、二人の日本人が船倉から出て来ました。彼らは戦後間もなく脱走し、大連で隠れ住んでいたところ、密告されソ連軍に捕まり埠頭で働かされていましたが、作業中荷物を担いだまま船倉に隠れていたようです。二度の脱走に成功したのです。兄は、船長から「乗船名簿に載っていないが、何とかするから富山さんの班で預かってほしい」と頼まれ、私たちの班員になりました。

翌日か翌々日は忘れましたが、騒ぎが起こりました。二人の脱走者が密告者を見つけたのです。ただで済むはずがありません。労働組合員だったと言われる密告者は、引揚者の怒りも買い「海にたたき込んでしまえ」と言われたり、船員の中にも炊事用の大きなしゃもじを貸すから殴ってしまえという者がでたりしました。「そんなことをして死んでしまいでしたら、上陸の際に乗船名簿

と合わない厄介なことになる」という船長の取りなしと本人の平謝りで、やっと治まりました。敗戦以来、ソ連の影で威張り散らしていた労働組合員は、多くの日本人からこれほど憎まれていました。

心配していた玄界灘も穏やかで、無事佐世保港に入港しました。初めて見る日本内地です。まず目に入ったのは、緑に覆われた島々でした。船が針尾崎の岸壁に横付けされ、上陸のため棧橋を渡りながらふと横を見ると、あの水雷艇「鳩」が繫留されていました。ああ、「鳩」は無事だったか、「雉」はどうしたろう、沈んでしまったのか、なごと思いつつ進んで行くと、今度は黒人米兵がいました。初めて見る黒人で、その黒さにびつくりしました。さらに米兵からDDTの洗札を受け、南風崎の収容所に入ったのが三月一日でした。その後、一人頭千円ずつの支援金を頂いたと記憶しております。

収容所で落ち着き先までの汽車の切符を支給す

るから申し出るようにと言われましたが、私たちには落ち着き先がありませんでした。母の兄が大村か佐世保にいます。何年前か、長兄が東京への出張の帰りに立ち寄ったことがあり文通もあったのですが、旅順から大連への移動の際、手紙などは持って来なかったため住所が分かりませんでした。収容所の係の女性に、「母の兄で、犬尾喜一郎というのが確か大村か佐世保にいたはずですが、住所が分からないのです」と相談しましたが、「あら、犬尾さんなら知っていますよ。お嬢さんが私のクラスメイトですから、連絡してあげます」と、伯父の所に連絡を取ってくれ、翌日従姉妹が握り飯を持って迎えに来てくれました。そして、佐世保市白南風町の伯父の家へ、私たち一家六人が転がり込んだのです。

私たちは飢えていました。特に青物とか野菜に飢えていて、伯父の家で残した葱の青い所はもちろん、食べられると聞いた野草も摘んで来ては食べたものでした。朝のテレビドラマ「おしん」

に出てくる大根飯は常食で、テレビを見ながら俺たちもあれを食べていたんだと、懐かしく思いながら見たものでした。さしあたりの生活費は、引揚者支援金でした。私は従姉妹の口利きで、佐世保社会保険出張所に雇用として四月一日に採用されました。日給二十円で、最初に戴いた給料は金五百四十円だったことは、今でも覚えています。

五月上旬、佐世保港から一つ南の日宇駅から徒歩二、三分ほどの兵舎跡が引揚者住宅としてあてがわれ、引越しました。役所からの帰途、川縁を歩いているとホテルが無数乱舞していた光景が、今でも目に浮かびます。間もなく、東京の佃島は空襲に遭わず、焼け残っていると話してくれた人がいました。次姉の夫の家が佃島だったことと、所番地も覚えていましたので早速連絡しましたところ、東京へ出て来いと返事がきました。次姉の夫は、志那町にいたところからの長兄の同僚でもあり、一年前の葫蘆島コロボツからでも長兄に「引き揚げて来たら事業を興しているから手伝え」と言っ

ていました。東京は転入を制限しているようでしたが、引揚者だから認めてもらえるだろうと上京することにしました。「私も上京することになりましたから、今月限りで退職したい」と役所の所長に申し出ました。所長は「○○さんの紹介だから、採用したのにすぐ辞めるとは」と不機嫌な様子でしたが、結局認めてくれました。

上京は、旅費節約のため鈍行列車を利用しましたが、三日三晩の長旅にはさすがにうんざりしましたが、御殿場周りだった列車の窓から、頂きに雪をかぶった美しい富士山を初めて間近に仰ぎ見て、私はただただ見惚れるばかりでありました。東京駅には義兄の弟二人が迎えに来てくれていて、下の弟はかつて旅順の我が家から旅順中学に通っていたこともあり、何年ぶりかで会ったときは懐かしく思いました。

東京駅からは徒歩で義兄の家に向かい、当時まだあった隅田川の渡し舟で川を越え、家に着いたのは夜の十時過ぎでした。義兄は、満州での経験

を生かし、土木請負を始めていました。深川清住町に事務所、資材置き場と宿舎があり、私たち一家もその宿舎に落ち着きました。宿舎は建坪二十四坪の総二階で、まだ復旧の進んでいない清住町一帯ではひととき目立つ建物でした。小名木川に面した二階から外を見ると、錦糸町駅から浅草橋駅辺りまで一望できたものでした。

義兄の会社は満鉄OBが興した会社の下請けで、茨城県北浦丘の灌漑工事、二十三年には秋田県雄物川上流の改修工事、二十四年には岩手県北上川の堤防工事などに赴き、その間に私は測量や製図などを習い覚え、後の私の仕事に役立ちました。

二十五年帰京後、会社は設備業も兼業し、私も設備技術者への道を進み、さまざまな資格を取得し、定年退職後某社の誘いを受け、建設業監理技術者として七十歳過ぎまで働くことができたことは、非常に幸運だったと思います。喜寿を迎えた今、かつての先輩、級友たちと月に一度、八重洲口のセンターで烏鷲を楽しんでいます。

かつて軍国少年で育った私ですが、近ごろつくづく思うのは、武力で得たものは武力の消滅と共に失うということです。満州も朝鮮も台湾も。あれから六十余年、平和な暮らしが続いています。これから、いつまでも平和に暮らしたいと思います。

人生観を変えた引揚げ体験

東京都 南風洋子

はじめに

一年三カ月の異常な体験が、いまだにかさぶたのようになつて体中にこびりついている。私の体のどこかで「どうせ人間なんて！」とささやき続け、私の心を虚ろにしている。それほど、私にとっては強烈な体験であった。

一 終戦の三カ月前に渡満

昭和二十（一九四五）年の五月二十日、梅雨入り前の爽やかな気候の神戸駅から、私の一家は満州の新京（長春）に向かった。当時、父四十四歳、母三十九歳、そして私は十五歳であった。渡満の理由は、父の勤務する日本エヤーブレーキ株式会社、軍需生産の増強のために政府の指示によって、満鉄の傍系会社として満州制動機株式会社を立ち上げて、その工場長を父が命ぜられたことに